

『モロー博士の島』にみる帝国のイデオロギー — 大英帝国の衰退とその反動 —

岩井 学

H・G・ウェルズの『モロー博士の島』(1896年)は、ダーウィンやT・H・ハクスリーの進化論思想を用いて分析されたり、またスウィフト的寓意として解釈されてきた。しかしこれらの批評には、このテキストが産み出された当時の歴史的状況に対する考察が欠けている。本稿では、『モロー博士の島』を社会的、政治的文脈のなかに位置づけ、当時の社会情勢がこのテキストのなかにどのように表れているかを分析した。ロンブローゾ、ウィリアム・ブース『暗黒のイングランドとその出口』、ノルダウ『退化』といったテキストを参照しながら、初稿と出版稿との比較、白人の登場人物の象徴的意味、物語の寓意的意味といった点を中心に分析し、『モロー博士の島』が、大英帝国の衰退に対する恐怖心から生まれたイデオロギー—世紀末大英帝国の人種退化、植民地主義、優生学をめぐる言説—の交錯し重なり合った重層的なテキストであることを論じた。

キーワード：『モロー博士の島』、世紀末大英帝国、人種退化論、植民地主義、優生学

序

H・G・ウェルズは1895年に出版された『タイム・マシン』で一躍注目される作家となったが、その翌年に出版された『モロー博士の島』では一転して多くの酷評を浴びた。なかには科学的見地から物語の内容の整合性を疑問視するようなものもあったが(1896年4月11日付『サタデイ・レヴュ』掲載のチャーマーズ・ミッチェル評)、批判の多くはむしろこの小説に対する生理的な嫌悪感を表わしているように見える。例えば5月9日『アシニアム』掲載の無署名の書評には、「芸術作品が嫌悪の感情を催させる場合、それがどの程度まで許されるかということ議論する際に、ウェルズ氏の近著のなかで描かれているおぞましい場面ほど適切な題材はない。……この本のなかでウェルズ氏によって執拗に描かれた苦しみの事細かな描写は、ただただ胸が悪くなるような効果をもたらすのみである」(Parrinder 51)。また4月18日付『スピーカー』では、

昨今出版されているセックスの問題を扱った問題小説を、身の毛もよだつ不快感という点で凌駕する小説は、H・G・ウェルズの『モロー博士

の島』をおいてほかにない。これを読んでみれば、近年小説を騒がせている女性主人公たちがなしえた以上の最低の胸くそ悪さ、愚かな想像力の剥き出しの表現というものがあるのだということ認めざるをえない。……ウェルズ氏には、ご承知のように、才能がある。しかし彼はその才能を、まったくもって下劣な目的のために用いているのだ。(Parrinder 50)

小説のタイトルにもなっているモロー博士とは、スキャンダラスな実験をおこないイギリス社会から追放された解剖学者で、ある孤島に渡り人目を忍んで動物を人間に造り変える解剖実験をしている。動物に慈悲のない実験を繰り返し、神に変わって自ら人間を造り出そうとする不敬なモローの物語を描いたことが、当時の読者たちのヒステリックともいえる反応を引き起こしたひとつの原因であろう。

『モロー博士の島』はエドワード・ブレンディックの手記という形をとっている。このイギリス人紳士は、自分の乗っていた船が難破するものの、通りかかったイペカクアナ号に助けられモローの島へとやってくる。この島には、モロー博士がその助手モンゴメリや召し使いとともに住んでいる。ブレンディックは周囲の召し使いたちの不自然な様子に疑

問を抱くが、モローからそれらがもともとは動物であると聞かされ、彼の秘密の実験について知る。モローが豹人間に殺されると、人間のように振舞っていた獣人たちはだんだんと動物へと回帰していき、遂にはモンゴメリをも殺してしまう。ブレンディックは一年近くをその島で過ごしたあと、なんとかカイギリスへ逃げ帰る。

生理学的に手を加えることによって、動物から人間への進化をいわば人為的に成し遂げようという発想にしても、また作者のウェルズが、「ダーウィンの番犬」と呼ばれたT・H・ハクスリー(1825-95)から直接教えをうけているという点からしても、『モロー博士の島』には進化論的含意が明白である。そのためこの小説はしばしばダーウィンやハクスリーの進化論思想との絡みで論じられてきた。¹⁾ また、祖国に戻ったあと人間不信に陥る主人公を、馬の国から帰ったガリヴァに重ねあわせ、ここからスウィフト的寓意を読み取ろうとするなど、この小説の背後にある作品群——『ガリヴァ旅行記』、『フランケンシュタイン』、『ジキル博士とハイド氏』、『ジャングル・ブック』など——を特定しようとするものも多い。²⁾ しかしこれらの批評全体にいえることは、このテキストの分析の際に、それが産み出された当時の社会的、政治的状況に対する考察があまりにも乏しいということである。

『モロー博士の島』が生み出された19世紀末の英国とは、どのような時代だったのだろうか。富山太佳夫氏の簡潔な要約によれば、「内には貧民問題と社会問題を抱え、外では大英帝国の突きつけてくる諸問題に直面せざるを得なかった時代、それを政治経済から文化にいたるまでのさまざまなレベルで解決しようと苦闘し、結局は帝国のいま少しの延命にかろうじて成功したように見える時代、それが世紀末と呼ばれるひとつの時期なのだ」(富山 265)。まずは貧困の問題があった。19世紀後半から都市にスラムが形成されるようになり、都市の貧困が大きな問題となっていった。この問題はしばしばジャーナリズムに取りあげられるようになり、その解決策をめぐる救世軍の創始者であるウィリアム・ブース(1829-1919)の『暗黒のイングランドとその出口』(1890) 始め多くの書物が出版された。

人々がこのように貧困の問題を取りあげたのは、それが大英帝国没落の象徴として捉えられたからである。帝国没落の根本原因は下層労働者階級の「人

種退化」(“degeneration”)にあるとされた。この問題を解決するための理論として、ダーウィンの従兄フランシス・ゴルトン(1822-1911)によって提唱されたのが優性学である。「科学的」な根拠に基づいて「健全なる人種」を生み出し、人種退化を防ぐことが優性学の目的とされた。そしてこの理論により植民地の原住民だけでなく、英国内の都市の貧民や犯罪者たちまでもが、進化の時間軸のなかで下位に位置する劣等人種として優性学的に排除すべき対象とされていく。また海外の植民地においても、他の列強ヨーロッパ諸国との争いにおける情勢の変化、植民地における抵抗運動の拡大といった多くの問題に直面していた。19世紀末とは、このように国内外にさまざまな問題を抱えていた時代である。本稿では、『モロー博士の島』をそれが産み出された歴史的な脈のなかに位置づけ、これらの社会的象徴がこのテキストのなかにどのように現われているか分析してみたい。

I. 劣等人種としての獣人

『モロー博士の島』には、結局出版されなかった初稿が存在する(以下「初稿モロー」とする)。出版稿とは物語の方向性は異なるものの、モローが孤島で動物に生体解剖を施し人間を生み出そうとする点では同じである。ところがこの二つの版の獣人の描写を比較してみると、そこには顕著な相違がみられる。『モロー博士の島』の獣人たちには動物的特徴が付与されているのに対し、「初稿モロー」の獣人はあたかもその島に住んでいる原住民であるかのように描写されていく。例えば召し使いをしている獣人の耳を語り手ブレンディックが見る場面がいずれの版にもあるが、出版稿では「驚きでわたしは身動きができなくなった。……この男の耳は尖っており、茶色の細い毛で覆われていたのだ！」(DM 88)となっているのに対し、「初稿モロー」では「耳はとても小さく、丸みを帯びている」(FM 104)と描写されているにすぎない。³⁾ 初稿でのブレンディックは「西インド諸島で様々な混血児を見てきたわたしには彼らは十分人間に見えた」という意味のことを言い、獣人は「褐色の水夫」、「黒人の女」、「褐色のニグロ」といったような表現で繰り返し描写されていく。

獣人たちがこのように描写されるのは、「初稿モ

ロー」が、始めは未開人と思われていたものが実は獣人であったという、いわば陳腐なホラー小説を意図したものであったためである。⁴⁾ 逆にいえば、「初稿モロー」の獣人たちは、南米の孤島の未開人であるかのように読者に印象づけるように描かれているため、当時のイギリスで劣等者とみなされたものたちの一般的表象がどのようなものであったかが、ここから浮かび上がってくる。白人であるモローやモンゴメリの描写は、例えばモンゴメリが「この若い男の顔はややげっそりしており、薄青い瞳、そして金髪的口鬚をぼさぼさに伸ばしていた。丈夫そうな亜麻布の白い服を着、裸足であった」(FM 110)と描写されるように、髪の毛や瞳の色から始めるといってヴィクトリア朝小説の常套的手法で描かれている。これに対して食事を運んできた召し使いは次のように描写される。

……白い亜麻の服をまとった褐色の男が羊肉を運んできた。この男は奇妙に丸く小さな頭をしており、斜に上を向いた鼻をしていた。薄い剛毛質の口ひげを生やし、白目のほとんどない、とても穏やかな褐色の瞳をしていた。……耳はとても小さく、丸みを帯びていることにわたしは気づいた。(FM 104)

また別の獣人は、

しかし黒人のその召し使い女はかなり奇妙であった。口はかなり大きく、そして顔の部分は頭の部分に比べかなり突き出ており、耳もとても大きく、本来の位置よりも上のほうにあった。(FM 113)

頭や耳の形にこだわるこの描写は、単に彼らが動物に似た顔をしているという以上のことを意味している。頭蓋骨の形は、T・H・ハクスリーが『自然界における人間の位置』でダーウィンの進化論を補強するために着目したものであった。そのなかでハクスリーは頭蓋骨の形や大脳などの構造から、人類と類人猿の近似性を論証しようとする。

わたしが示そうとしてきたのは、動物界とわれわれとのあいだを……形態的に完全に区別するような境界線は引けないということである。

さらにわたしの信念をもう一言付け加えさせてもらうなら、身体的な相違で区別しようという努力も同様に空しいものであるし、また感情や知性といった最も高度な能力ですら、生命の下等の形態のなかにすでに芽生えているのである。(Huxley 111-12)

しかし動物と人間との進化上のつながりを述べるいっぽうで、ハクスリーはそれと矛盾しかねない主張を続けて展開させる。つまり西洋の「文明人」と非西洋の「未開人」との溝を強調するのである。

しかしそれと同時に、文明人と獣類とを分かつ溝がいかにか深いかということについて、あるいは、獣類から進化してきたのであろうとなかろうと、文明人は獣類とは絶対的に異なるということについて、わたしほど強く確信しているものはない。……

自分の才能をそれぞれの時代に開花させた詩人、哲学者、芸術家たちが、裸で獣のような未開人の直接の子孫である可能性が……疑いえないからといって、その輝く栄光が損なわれてしまうことがあるだろうか——狐よりもほんの少しばかり高い知性を持ち、それゆえ虎よりもいっそう危険な未開人の子孫であるからという理由で。(Huxley 112)

このように、『自然界における人間の位置』は、人類と他の動物との近似性を強調するいっぽうで、非西洋の「未開人」を進化の途上にあり西洋人の下位に位置する存在とみなし、両者の差異を「科学的」に立証しようとするものでもあった(次頁図1)。⁵⁾

このような進化の理論は、科学の分野だけでなく、社会のさまざまな場に応用されていく。例えば頭蓋骨や耳の形は未開人や犯罪者を見分けるための指標として「科学的」に研究された。この理論を広くひろめたのがイタリアの精神病理学者チェーザレ・ロンブローゾ(1836-1909)である。文明社会における犯罪は、犯罪者のなかに発達せずに残る未開時代の残滓によって引き起こされると考えたロンブローゾは、頭蓋骨の形から犯罪者を特定するという骨相学により犯罪人類学を創始し、19世紀末から20世紀初頭にかけて社会的影響力を持った(図2)。⁶⁾ また同様に耳など他の身体的特徴から犯罪者を特定し

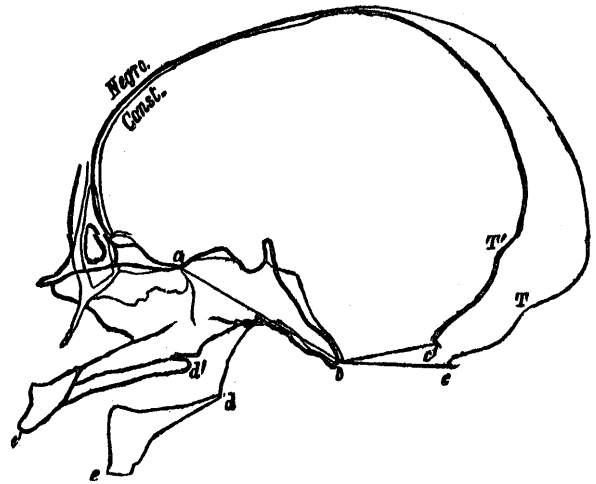
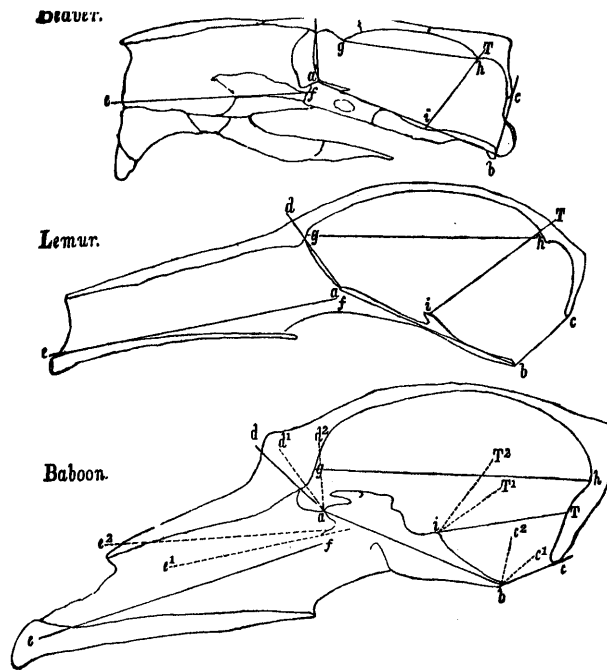


図1. 頭蓋骨基底部の長さ(ab)に対する大脳半球(gh)の割合は、進化が進んでいくに従って大きくなるとされる。左上から順にビーバー、キツネザル、ヒヒ、右図アフリカ黒人(「ニグロ」、太線)、コンスタンチノーブルで見つかった頭蓋骨(細線)。『自然界における人間の位置』より。



図2. ロンブローゾによる犯罪者の頭蓋骨。Pickより。

ようという試みもなされた(図3)。「初稿モロー」において、獣人の肌の色のみならず頭や耳の形が執拗に描写されていくのは、それらが劣等者とそうでないものを分かつ指標と考えられていたからである。このように、「初稿モロー」の獣人には、当時の劣等者の表象がそのまま使われているのである。

それに対し出版された『モロー博士の島』の獣人は、「初稿モロー」とは異なり、劣等者とされた「未開人」を連想させるようなあからさまな外見の



Platta Piccola Medta Grande Grande
Elice: Porzione posteriore (apertura dell'orlo).



Aperto Intermedio Aderento Mammellonato Con inciatura
Elice: Particolarità.



Nefoliti darwiniana Surgimento darwiniano Sporgenza darwiniana Tubercolo darwiniano El. post. fas.

図3. 犯罪者の科学的人相調査。Pickより。

描写は影をひそめる。例えばその前半では身体的特徴、目つき、身のこなしに、先述の尖った耳のような動物的特徴が付与されていたり、「動物的な」、「人間とは思えない」といったような形容詞が頻繁に使われている。

この不可解な儀式に没頭している三人は、人間の姿形こそしているが、見慣れた動物のような雰囲気が奇妙にも感じられた。人間の形をして

おり、粗末な布を身にまとい、身体的には人間のような形をしているが、その生き物の動き、顔の表情、その存在全体に、見間違いようのない豚の面影、まぎれもない獣の痕跡を残しているのである。(DM 99)

その一方で、とくに物語の後半になると、人間とはかけ離れた存在に見えた獣人のなかに、人間との類似点が仄めかされるようになる。プレディックは言語を人間と動物とを弁別する指標と捉え、自分に語りかけてくる猿男を人間であると考え。獣人がももとは動物であるとモローから言われても、それをにわかには信じる事ができない。「わたしは笑い、言った。『冗談はよしてくれ。やつらは言葉話し、家を建て、料理もする。やつらは人間だ』」(DM 128)。彼らがももとは動物であったことを理解したあとも、プレディックは、獣人の掟を犯してしまったために窮地に追いつめられた豹人間のなかに、動物性ととも人間性をも垣間見る。「これは奇妙な矛盾と映るかもしれないが……その生き物が、紛れもない動物の仕草で、目をギラギラさせ、そして出来損ないの人間の顔を恐怖に歪めている姿を目の当たりにして、わたしはあらためてそこに紛れもない人間性を垣間見たのである」(DM 166)。このように獣人と人間の類似性がたびたび強調されていき、遂にはその両者の社会が重ね合わされる。撃ち殺された豹人間の死体に対し、「獣人たちは極めて人間的な好奇心を示した。……奇妙な確信がわたしを襲った。その言葉はつたなく、姿形も醜いが、眼前のこの光景は人間社会の完全な

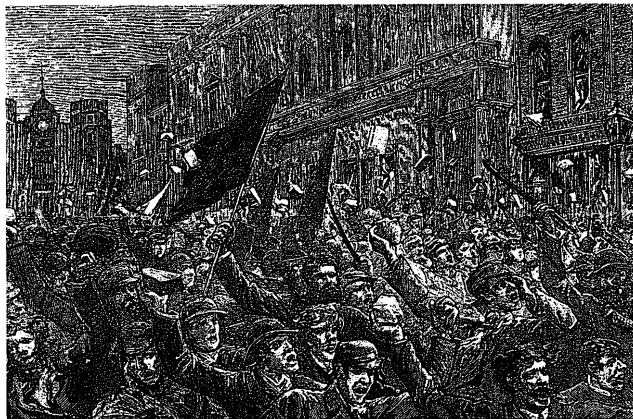


図4. 中産階級から見た労働者階級のイメージとは、まさに獣人のような群集であった。1886年の『グラフィック』誌より。

る縮図なのだ」(DM 167)。

二つの稿の描写の相違は、物語の方向性の違いからくる。『モロー博士の島』はミステリーを意図したのではなく、人間にも動物とあまり変わらない面があるということ、つまり人間のなかにある獣性がテーマの一つである(このことに関しては本稿第III章で論じる)。しかしここで注目したいのは、『モロー博士の島』の獣人の象徴的意味である。彼らには、動物と人間両方の性質が付与されている。つまりこれら動物とも人間ともつかない存在は、進化論的時間軸のなかで動物と人間の間位置するとされ、人間という高みには到達していないとされた劣等者たちを体現している。彼らは、優性学的に排除すべき英国国内の下層階級、非西洋社会の原住民といった存在と重なってくるのである。「動物の肉を食べてはならない」という掟を破った豹人間を糾弾するために、モローは獣人たちを一堂に集める。モローやプレディックの目の前に集まった彼らは「怪物たち——表情と仕草が少し変わっているほかはほとんど人間とってよい者もいれば、不具者のような者もあり、また悪夢の住人としか思えないような奇妙に歪んだ奇形のような者もいる」(DM 163)。プレディックに「わき上がる恐怖」を抱かせ「大反乱」(DM 162, 164)を起こすこの半獣半人の群集には、当時の中産階級が大英帝国衰退の元凶とみなし、かつ恐れていた下層労働者階級の姿が映し出されている(図4, 5)。さらにプレディックは次のように考える。「彼らがかつて獣であったころは、本能は環境にみごとに適合し、それなりに幸福に暮らしていた。それが今では、人間性という足枷をはめられ当惑している。決して消えることのない恐怖にさいなまれ、自分たちの理解できない掟に悩まされている。彼らの人間もどきとしての存在は苦



図5. J・F・サリヴァン、『英国の労働者』(1887)のなかで野獣として表象される靴の修繕屋。Greensladeより。



図6. 当時イギリスの植民地であったアイルランドの人びとを野獣や怪物に見立てたもの。上から1843年, 1882年の『パンチ』誌より。ちなみに右のイラストを描いたのは、『不思議の国のアリス』の挿絵画家ジョン・テニエルである。

悶のうちに始まり、いつ果てるともしれぬ内面の葛藤とモローへの恐怖に苦しみ続けるのだ……」(DM 167-68)。ここで、被植民者たちを野獣のように表象するのはいわばクリシェのようにおこなわれていたことを考えあわせると、「未開社会」を無垢で幸福な社会と捉える見方にも偏見があるとはいえ、西洋的な価値観やキリスト教によって「開化」させると称して、実際には西洋人植民者たちによって搾取に苛まれていた植民地のありようがここに見事に浮かび上がってくる(図6, 7)。獣人たちは、まさに「人類の歪んだカリカチュア」(DM 119)として描かれていく。「初稿モロー」のようなあからさまな表象はないにもかかわらず、しかし『モロー博士の島』の獣人たちの背後にはこのような英国内の下層労働者たち、植民地の被植民者たちの姿があるのである。

Ⅱ. 植民地としてのモローの島

しかし『モロー博士の島』のなかで劣等者としての烙印を押されているのは実は獣人だけではない。白人の支配者であるモローやモンゴメリにもその印

は深く刻まれているのだ。彼らがことごとく追放者であるということがそのことを象徴的に表わしている。モローはあるジャーナリストによって自分の生体解剖実験が暴露されたために、イギリス社会から追放された。モンゴメリも、具体的なことは明かさないが、ある過ちにより「文明からの追放者」となったとプレディックに告げる(DM 75)。さらにこの二人だけでなく、プレディックを最初に救ったイペカクアナ号の船長も「免許を無くしたか何か」で世を憚る身分となっており、モンゴメリもその船がどこから出帆したのか知らない(DM 66)。また紳士階級とされ、恐らく興味本位で旅行に出た(「初稿モロー」では、ダーウィンを模して新たな事実を発見しようと旅立ったことになっている)プレディックですら、イペカクアナ号から出ていくよう船長から迫られる場面で、追放者として描かれる。「わたしを追放しようとしている船長に抗うほどの体力が残っていないことは……わたしも明確に理解していた」(DM 79, 強調引用者)。

ここで追放の象徴的意味に注目するのは、19世紀末から20世紀初頭にかけて、多数の犯罪者や貧民が事実上の追放者として国外に移住していたという事

実があるためである。大英帝国衰退の元凶とされたスラムの住民たちや犯罪者を移民などの形で国外に出すことが、帝国復活の方法の一つと考えられた。ウィリアム・ブースは先述の著書のなかで貧困の克服の方策として移民を挙げ、これを「再生への最終段階」と論じている (Booth 143)。犯罪者や貧困層を国外に排除するということには、優性学的な見地から劣等者を排除するというイデオロギーが結びついていたのである。

さらに登場人物たちの追放者としての存在は、その飲酒癖により強調される。飲酒とは、人種退化の第一の原因でありまた結果でもあると考えられ、怠惰や性的放埒といったものと結び付け考えられていた。ブースによれば、

わたしが大酒飲みの問題を取り上げるのは、飲酒から引き起こされる問題がすべてのものの根幹にあるからである。現代の貧困、不潔、不品行そして犯罪の九割は人体を蝕むこの主因に端を発しているのである。現代社会の多くの害悪も……それらが常にアルコール浸しになっているということがなければ、だんだんと少なくなり、やがては無くなることであろう。(Booth 47)

「初稿モロー」であからさまな劣等人種のイメージで描かれていた獣人たちが飲酒に耽っていたように、『モロー博士の島』ではイペカクアナ号の船長、そしてモンゴメリがその害毒に苛まれている。船長は「自分の船室でたいい酔っぱらって」おり、またモンゴメリも『「俺がここに流れ着いたのも、あの悪魔の飲み物のせいさ』』と言い、自分が英国を離れざるをえなくなった原因に飲酒が関係していることを仄めかす (DM 91)。

さらに興味深いのは、モンゴメリの描写である。それはすでに引用した初稿のそれと比較するとはっきりする。「初稿モロー」ではやつれた顔、瞳、口鬚、服装が手短かに述べられていただけだったのに対し、『モロー博士の島』では前者には見られなかった特徴が列記されていく。

気がつくとき、わたしはむさ苦しい小さな船室のなかにいた。若い男が座って、わたしの手首を握っていた。亜麻色の髪、硬そうな麦わら色の

口鬚、垂れ下がった下唇。一瞬、われわれは無言で見つめあった。彼の潤んだ瞳は灰色で、そこには不思議と表情が欠けていた。(DM 65)

これにモンゴメリの舌足らずな話し方も加えると、最終稿になり付加されたこれらの思わせぶりな表現に、同性愛の暗示を読み取ることができる。オスカー・ワイルドが同性愛の廉で投獄されるという英国社会を揺るがした「事件」が起こったのが1895年、「初稿モロー」(1894)と『モロー博士の島』(1896)のちょうど狭間の出来事である。⁷⁾ここで重要なのはこの事件の作品への影響ではなく、モンゴメリに世紀末のデカダントのイメージが重ね合わされていることである。世紀末においてデカダントとは、ワイルドがそうであったように、社会から追放されるべき存在であり、「退化」という言葉を広めたマックス・ノルダウの『退化』(ドイツ語版1892, 英語版1895)のなかで人種退化の元凶として執拗に攻撃されている存在である。このように『モロー博士の島』では、獣人たちだけでなく、イペカクアナ号の船長はじめモロー、モンゴメリたちにもまた、英国内で人種退化の元凶とされた劣等者としての刻印が押されているのである。

一方で追放者として国外に移住していったものは、彼の地で植民地人として振舞い、現地の先住民を支配し、そこで搾取した富を本国へと送った。例えばディケンズの『大いなる遺産』で、脱獄囚としてオーストラリアに逃げ隠れたのち、現地でえた富をピップに贈り続けたマグウィッチがその一例である。『モロー博士の島』においては、このような追放者たちが獣人たちの支配者として振舞うことになる。このように見てくると、モローの島は、まさしく当時の英国植民地の縮図なのである。⁸⁾

Ⅲ. 人間の動物化—理性の喪失

プレディックは獣人たちに人間性を垣間見るが、逆に白人の登場人物たちには時として獣性を思わせる性質が付与される。人間の動物化というこのモチーフは、物語の冒頭ですでに暗示されている。難破したレディ・ヴェイン号から小型救命艇に移ることでできたプレディックを含めた三人は、空腹という欲求に耐えきれなくなると理性を逸し、相手を殺してその肉を食べようとする(ここで、頑強

な二人が取っ組み合っているうちに海に落ち、一番弱いプレディックが生き残るといのは、「適者生存」に対する皮肉でもある。また常に酒に溺れ、理不尽で傲慢な振る舞いでるイペカクアナ号の船長の獣性も明白である。⁹⁾

モローやモンゴメリも、物語が進んでいくにつれ、人間の理性のたがが外れたかのように振舞うようになる。肉の味を知ってしまった豹人間を、再び捕らえられ拷問にかけられるよりはとプレディックは銃でひと思いに殺してしまう。安楽死へと導いた極めて人間的なこの行為に対して、モローは怒りを顕わにする。「モローの残忍性という卑しい面が見え始めた」とプレディックが述べるように、モローは、自分が動物の特徴として挙げた「怒りや憎しみ」にはからずも自分自身が捉えられる (*DM* 167)。また酒という「人種退化」の象徴を手放さないモンゴメリも「とくにウイスキーを飲んだあとなど、ムリングを蹴り、殴り、また石や火のついたマッチを投げつけることもあり、挙げ句の果てに彼は「実際のところこれら獣人と紙一重で、人類に属するとは言いがた」い存在になり果てる (*DM* 153, 182)。

さらにプレディックも例外ではない。彼が動物化していくことは、実は物語の中盤ですでに暗示されている。プレディックが獣人たちと初めて接し、頭が混乱した翌朝、自分の部屋で目覚める場面である。

目覚めると、すっかり明るくなっていた。そのまましばらく横になって天井を眺めていた。……空腹感に襲われハンモックから降りようとすると、わたしの意図を察したかのようにハンモックは御丁寧にくるっと回転し、わたしは床に投げ出され四つん這いになった。

起き上がって食事の前に座った。頭が重く、初めのうちは昨夜の出来事の記憶がぼんやりと頭をかすめるだけだった。ガラスのはまっていない窓から朝の微風が気持ちよく入り込んでくる。この風と食べ物のおかげで、わたしは動物の覚える満足感を味わった。(*DM* 106-07, 強調引用者)

物語が進むにつれ、プレディックの動物性は徐々に顕わになってくる。獣人が退化しだんだんと動物に戻っていくにつれ、「わたしにも奇妙な変化が見

られたに違いない。……今でもよく言われるが、目つきは異様に鋭く、身のこなしは常に油断なく敏捷になった」(*DM* 198)。そして「昼間寝て夜は見張りをする」という夜行性動物のような生活を始める。性質も、理性的というより本能に身を任せるようになり、「ときどき痲癢を起こして、腹立ちまぎれに罪のない木をめった切りにしたりした」(*DM* 200)。イギリスに帰国し、しばらく経った後でさえ、彼は自分が動物であるかのように想像し、語る。「そしてわたし自身、理性を備えた生きものではなく、脳におかしな障害をかかえた動物であるかのように感じ、おかげで旋回病にかかった羊のようにひとり彷徨い歩いていたのだ」(*DM* 206)。このように、白人の登場人物たちは人間と動物との境界を行き来するようになるのである。¹⁰⁾

これら西洋人たちの変化は、『モロー博士の島』最終部の人間の動物性というテーマへとつながっていく。プレディックはモローの島を離れ漂流しているところをサンフランシスコ行き帆船に拾われ、なんとかイギリスへと戻ってくる。しかしそこで彼を待っていたのは思い描いていた「懐かしい健全な人間社会」ではなかった (*DM* 170)。ロンドンの街を行き交う人々がその人間的な表層の奥に、動物的な面を隠しているように見え、彼は恐怖に慄く。

そんなとき、わたしは周囲の人間を見まわし、そして恐怖にふるえる。……彼らのなかから獣性が噴き出してくるのではないかと、そして島の住人たちに起こった退行が、もっと大きな規模で再現されるのではないかと感じてしまうのである。……そして教会にでも逃げこむと、そこですら、牧師がああ猿男のように「大きな考え」をまくしたてているように思え、わたしは気が滅入ってしまう。図書館に入れば、熱心に読書している顔が、獲物を辛抱強く待つ動物の顔に見えてしまうのである。(*DM* 205-06)

ハクスリーと有名な論争を演じた英国国教会牧師ウィルバーフォースへの当て擦りを含め、ここにスィフト的な人間への嫌悪を読み取るのは、ある意味で当然といえる。しかしそれで止まってしまっはいけない。このことが書かれた当時、つまり19世紀末において、このことがどのような意味を持ちえたのか考察する必要がある。ひとつには、この文章か



図7. リヴィングストンをアフリカの奥地で見つけたスタンリー卿。ヘンリー・H・スタンリー著、『わたしは如何にしてリヴィングストンを見つけたか』(1872)より。モローとプレنديックが会おう場面の挿絵としても使えようである。

ら、獣人たちの退化が、当時盛んに議論されていたイギリス人の人種退化、そして大英帝国衰退のメタファとして機能することが分かる。

さらにもう一点、帝国主義の負の側面である。プレنديックは、人間たちがその獣性を顕わにするのではないかと恐れる。「出会う人たちが、男も女も、人間によく似た獣人としか思えなかった——外見だけ人間の姿形に造られている動物で、いまにも本来の姿に戻りはじめ、次々と凶暴な本性を現わすのではないかと恐えてしかたなかったのだ」(DM 204)。プレنديックの危惧が現実のものとなったとしか思えないような出来事が1890年代になり次々と人々に知られるようになる。「未開人」に対し、文明人を自称していたヨーロッパ人の、人間とは思えぬ残虐な振る舞いである。例えば、アフリカで行方不明になったリヴィングストンを1871年タンガニーカ湖畔で発見し名を挙げた人物にヘンリー・M・スタンリー(1841-1904)がいる(図7)。スタンリーは、先に引用したブースの著書の冒頭で、「暗黒のアフリカ」に恐れず足を踏み入れ開拓した功労者として讃えられている。しかしこの本が出版されたのと同じ年、つまり1890年、次のような事実が反奴隷協会によって明らかにされた。それは、スーダンのエミン・パシャ救援に向けての1887年から89年にかけての探検で、スタンリーは奴隷を兵士として利用し、現地で雇った運搬人を鞭打ち、原住民たちを殺戮し、村々を焼き払うという蛮行を重ねており、さらに悪名高いアラブの奴隷商人まで雇っ



図8. シャーロック・ホームズの生みの親、コナン・ドイルによる『コンゴの犯罪』の口絵写真。獣人たちに対する生体解剖を彷彿とさせる。富山より。

ていたというのである。¹¹⁾ またスタンリーがその建国に加担したコンゴ自由国では、ウェルズがまさに『モロー博士の島』を執筆していたころ、「現地の役人の命令通りにゴムを採集してこないと、みせしめに手首を落とされ、部落を焼かれた」といった残虐な行為が先住民たちに対しなされていた(富山 321; 図8)。¹²⁾ 『モロー博士の島』のなかで退化し動物化していく人間たちは、「文明化」の名のもとに帝国主義の裏側で様々な非人間的な行為をおこなっていた西洋人たちの姿なのだ。

IV. 大英帝国の未来図としての『モロー博士の島』

最後に、『モロー博士の島』全体を俯瞰し19世紀末の社会と重ね合わせてみると、どのようなアレゴリーが浮かび上がってくるであろうか。モローは、自分の持っていた科学の知識を総動員して獣人を造っていく。モローはプレنديックに説明する。『近代的な医療技術と、進化の法則に関する真に科

学的な知識を身につけ、この問題に取り組んだのは、わしが最初だったのだ』(DM 135)。動物から人間を造っていくモローの実験は、「人種退化」していく国民と国家を再生させるため、「科学的」に「健全な人種」を生み出していくことを提唱していた優性学のメタファとなる。モローの実験は失敗に終る。モローの知識と技術と執念を持ってしても獣人たちの「退化」を止めることはできない。結果として優性思想が排除しようとしていた劣等者たちを生み出してしまふ——「『わしは、英国に研究成果を持ち帰る前に、もっと優れたものを造ろうと決意した。造るたびによくなった。ところが、どういうわけか、もとへ戻ってしまうのだ。頑固な野獣の肉体が、日に日によみがえってくるのだ——』」(DM 144-45)。モローの島は、没落へ向かいながらも、優性学により「健全な人種」を生み出そうとしていた大英帝国のペシミスティックな未来図となる。

以上のように、孤島における科学的な人種改良に取り憑かれたこの博士の物語りには、時代のエートスが敏感に映しだされており、このような時代背景がその背後から透けて見えてくる。すなわち『モロー博士の島』は、世紀末大英帝国の人種退化、植民地主義、優性学をめぐる言説——大英帝国衰退に対する恐怖心から生まれた様々なイデオロギー——が交錯し重なりあった、重層的なテキストなのである。当時の読者がこの小説に生理的な拒否反応を顕わにしたのも、作中に描かれた獣人に対するモローの不敬な実験のためというより、むしろ『モロー博士の島』のなかに、衰退に向かう大英帝国の暗い予兆を感じ取り、それに言い知れぬ不安感を抱いたためではないだろうか。

本研究は、2004年度熊本保健科学大学特別研究費の助成を受けたものである。

註

1) 例えば Haynes は、ダーウィニズムの追随者によって取りあげられてきた、進化に関する重要な問題点のほとんどすべてが『モロー博士の島』のなかで論じられていると主張している。Haynes 26-36参照。また McConnell はこの小説について、通俗的ダーウィニズムが広めた誤解に対する風刺であると論じている (99-102)。

ウェルズの分析にハクスリーを持ち出す場合、『進化と倫理』(1893)に言及するのが常套だが、本稿ではそれより30年前、ダーウィンの『種の起原』の初版のわずか4年後に出版された『自然界における人間の位置』(1863)を援用する。

- 2) ウェルズ自身がアトランティック版の序文のなかで「この作品にはスウィフトの影響が一目瞭然である」(ix)と述べていることもあり、『ガリヴァ旅行記』との関連に関しては Hammond, “*The Island of Doctor Moreau: A Swiftian Parable*” 始め多くの批評家が論じている。またこの小説の創作に影響を与えた作品の分析は、Bergonzi 97-112, Philmus, SA 2-6などを参照のこと。
- 3) 『モロー博士の島』からの引用はすべて H. G. Wells, *The Island of Doctor Moreau: A Critical Text of the 1896 London First Edition, with an Introduction and Appendices*, ed. Leon Stover (Jefferson: McFarland, 1996) からとし、括弧内に DM とともにページを記す。また「初稿モロー」からの引用はすべて H. G. Wells, “The First Moreau.” *H. G. Wells, The Island of Doctor Moreau: A Variorum Text*, ed. Robert M. Philmus (Athens: U of Georgia P, 1993) からとし、括弧内に FM とともにページを記す。『モロー博士の島』のハイネマン社によるイギリス初版(1896)、ストーン&キンボール社によるアメリカ初版(同年)、およびアトランティック版(1924)におけるテキストの異同に関しては、*A Variorum Text* および Philmus, RM 128-36参照。また翻訳にあたっては中村融訳、『モロー博士の島』(東京創元社, 1996)を参考にした。
- 4) Philmus はこの稿を「謎解きとしてのミステリー」と呼んでいる (SA 3-4)。
- 5) このことの名残りは『モロー博士の島』にも次のようにも現われている。例えば獣人の顔の特徴のひとつとして「両顎前突の」(“prognathous”)というあまり聞きなれない語が使われるが、これはハクスリーが『自然界における人間の位置』でアフリカ黒人(“Negro”)特有の顔の特徴として括弧付きで用いているタームである (DM 151; Huxley

- 150)。
- 6) ロンブローズと骨相学について、詳しくは Pick 109 - 52 参照。また Hurley は、ロンブローズおよびフランスの神経学者 J - J・モローの理論を援用し、(初稿ではなく出版稿の) 獣人およびモローに犯罪者としての刻印が押されていることを指摘している (Hurley 103 - 09)。
- 7) 同様の指摘は Hurley 108 参照。
- 8) Hammond も「モローの島は白人支配のマイクロコスモスであり、モローの失墜は帝国主義の崩壊の興味深い予兆となっている」(36) と論じているが、獣人の退化を当時の人種退化論と結びつけず白人支配の終焉と短絡的に結論づけるなど、世紀末の具体的事象への配慮を欠いている。
- 9) 船長の獣性に関しては Huntington 65 参照。
- 10) T・H・ハクスリーの提起した進化と倫理の問題を『モロー博士の島』と重ね合わせ分析を試みているので、本稿とは議論の方向性は異なるものの、Huntington もこの作品における動物と人間の境界が曖昧であることについて論じている (63 - 70)。
- 11) Driver 140 参照。
- 12) スタンリーおよびコンゴ自由国に関しては、富山 307 - 24 参照。

引用文献

- Bergonzi, Bernard. *The Early H. G. Wells: A Study of the Scientific Romances*. Manchester: Manchester UP, 1961.
- Booth, William. *In Darkest England and the Way Out*. London: International Headquarters of the Salvation Army, 1890.
- Driver, Felix. *Geography Militant: Cultures of Exploration and Empire*. Oxford: Blackwell, 2001.
- Greenslade, William. *Degeneration, Culture and the Novel 1880 - 1940*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Hammond, J. R. "The Island of Doctor Moreau: A Swiftian Parable." *The Wellsian* 16(1993): 30-41.
- Haynes, Roslynn D. *H. G. Wells: Discoverer of the Future*. London: Macmillan, 1980.
- Huntington, John. *The Logic of Fantasy: H. G. Wells and Science Fiction*. New York: Columbia UP, 1982.
- Hurley, Kelly. *The Gothic Body: Sexuality, materialism, and degeneration at the fin de siècle*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Huxley, Thomas H. *Man's Place in Nature*. Ed. Stephen Jay Gould. New York: Random, 2001.
- McConnell, Frank. *The Science Fiction of H. G. Wells*. Oxford: Oxford UP, 1981.
- Parrinder, Patrick, ed. *H. G. Wells: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1972.
- Philmus, Robert M. "The Satiric Ambivalence of *The Island of Doctor Moreau*." *Science-Fiction Studies* 8 (1981): 2-11. [SA]
- . "Revisions of *Moreau*." *Cahiers victoriens & edouardiens* 30 (1989): 117-40. [RM]
- , ed. *H. G. Wells, The Island of Doctor Moreau: A Variorum Text*. Athens: U of Georgia P, 1993.
- Pick, Daniel. *Faces of Degeneration: A European Disorder, c.1848 - c.1918*. Cambridge: Cambridge UP, 1989.
- Wells, H. G. *The Island of Doctor Moreau and The Sleeper Wakes, The Atlantic Edition of the Works of H. G. Wells*. Vol. 2. London: Fisher Unwin, 1924.
- . *The Island of Doctor Moreau: A Critical Text of the 1896 London First Edition, with an Introduction and Appendices*. Ed. Leon Stover. Jefferson: McFarland, 1996.
- ウェルズ, H・G・, 中村融訳, 『モロー博士の島』, 東京創元社, 1996.
- 富山太佳夫, 『シャーロック・ホームズの世紀末』, 青土社, 1993.

(平成17年1月24日受理)

岩井 学

〒861-5598 熊本市和泉町325番地

熊本保健科学大学

保健科学部 衛生技術学科

e-mail: iwai@kumamoto-hsu.ac.jp

Imperial Ideology in *The Island of Doctor Moreau*: Decline of the British Empire and its Reaction

Gaku IWAI

Abstract

The Island of Doctor Moreau by H. G. Wells (1896) has been analyzed in terms of the evolutionary theories by Charles Darwin and T. H. Huxley, or has been interpreted as a Swiftian allegory. The critics have, however, paid little attention to the historical contexts of the time when the text was produced. In this essay I attempt to analyze the text considering the contemporary social and political contexts. The subtexts for the analyses include *The Darkest England and the Way Out* by William Booth, *Degeneration* by Max Nordau and the criminal anthropology of Cesare Lombroso. The focal points in this essay are the differences of character descriptions in the first and the published draft, the symbolic meaning of the Western characters, and the allegorical meaning assigned to the story. These analyses reveal that *The Island of Doctor Moreau* is a text which reflects various discourses on degeneration, colonialism and eugenics produced at the *fin-de-siècle* Britain — ideologies produced and circulated for fear of the decline of the British Empire.